
東京魔学院～精霊と契約主～

カルパッチョ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京魔学院〜精霊と契約主〜

【Nコード】

N4965D

【作者名】

カルパッチョ

【あらすじ】

日本の東京にある「東京魔法学院」。学院生徒会公安部のメンバーは学院内を彷徨う一人の精霊と出会う。その精霊はこの学院内に契約主が居るといふ。一方その精霊を消そうと動く生徒の姿もあった。東京魔学院を舞台に公安部と一人の生徒の戦いが始まる・・・

一話「勧誘」

一話「勧誘」

二十世紀初めより、世界的に魔術というものが民衆にも広がり始めた。

始まりの地は欧州。古代より多くの魔術師が住むと言われてきた場所。

魔術はやがて二十世紀半ばにはアジアやアメリカ大陸にまで広がった。

日本の首都東京にも東京魔学院が創立され、日本でも魔術師の育成が

始まった。そしてそれから半世紀ほどが経過し、時は2015年春。

今年もまた東京魔学院に入学式の日が訪れた。式自体はすぐに終わった。

生徒達は自分達のクラスへと向かって行く。この学校は全寮制である。

特別な事情が無い限り、学校寮での生活となる。普通の学校で言えは高

校から大学にあたり、学年は一年から七年まで。特に成績が良い場合は

飛び級もありうる。カリキュラム自体は普通の高校とあまり変わり

ない。ただ、魔法学という学問が追加されているだけ。国語や数学や英

語や理科などの一般教養も学ぶ。ただし、この学校で一番重要視される

のは魔法学の成績である。一年三組では喧騒が起きていた。一人の生徒

が数人に囲まれている。

「お前・・・契約制霊がいるらしいな」

囲んでいる生徒の真ん中にいる者が聞く。だが、相手は答えない。
質問

を聞いているかどうかさえ疑わしい。契約制霊というのは、人間
と契約

を結んでいる精霊のことだ。精霊魔法で呼び出される一般精霊と
は格が

違う。故に契約制霊を制御するのは難しく大人でさえ苦勞する。
普通の

高校生が制御出来るような存在ではない。

「聞いているのか、お前」

「・・・くだらん質問に答えるほど暇ではない」

その一言に質問をした生徒は思わず殴りかかった。だが、その拳
が止

まっている。どれだけその生徒が力を込めようと腕は動かない。
まる

で何かに遮られているかのよう。それを見ていた他の生徒が加
勢し

ようとしたりしたその時、囲まれていた生徒が笑う。

「物好きな連中だ。入学早々病院送りになりたいとは・・・」
「待て」

笑っていた生徒の動きが止まる。クラス全員が教室の入り口付近
を見て

いた。生徒名簿を持った一人の教員と別の学年の生徒が並んで立
っ

る。別の学年の生徒は騒ぎの中心地へと向かい歩いていく。

「Aランク以上の魔法は使用厳禁だと聞いているはずだが？」

「身を守るためだ。・・・規律にも例外はあると思うが」

「・・・裁くつもりはない。ただ、今後は注意してもらいたい」

生徒は頷いた。別の学年の生徒はその者に更に近づき耳打ちした。
「放課後生徒会室に来てくれ。・・少し話がしたい」

よく見るとその生徒は腕に腕章をつけている。学院生徒会公安部と書か

れた腕章を。学院生徒会公安部と言うのは学院内の秩序を守るために作

られた組織だ。教員の次に権力を持っているのがこの公安部である。学

院内ではAランク以上の魔法を使用厳禁としており、その使用の現場を

見た公安部は教員の代わりに生徒を罰することも出来る。

「騒いでないで、さっさと席に着け」

ホームルームは十分ほどで終わった。担任が教室から出て行くと公安部

の生徒に話しかけられていたあの生徒は静かに立ち上がり教室を出て行

こうとする。だがそれを呼び止める者がいた。

「Aランクの魔法を使えるなん・・お前凄いな」

「何だ、お前は」

「ああ、俺滝川健太。ちなみにさっきのは俺の兄だ。・・お前の名前は？」

「カズキ」

呟くように言う。カズキは生徒会室を目指し歩く。健太も何故か着いて

きている。生徒会室の前でカズキは足を止める。ドアをノックし扉を開

ける。そこにいたのはさっきの生徒だった。

「よく来たねカズキ君。・・健太、悪いがお前は外で待つてろ」

健太が無言で出て行く。生徒会室は一般生徒は立ち入り禁止となっ

る。カズキは椅子に座った。目の前に公安部の生徒が座る。

「俺は滝川輝彦。一応、公安部の最高責任者だ」

「・・・そんな人間が俺に何の用だ？」

「・・・公安部に入らないか？」

単刀直入だった。カズキは輝彦の顔を見ていた。冗談を言っているよう

な顔ではない。だが、カズキはその話を受けるつもりはなかった。

「この公安部は一年は入れないと聞いた」

「ああ。だが例外はある。Aランク詠唱破棄はこの5年レベルだ」

魔法にはそれぞれの力に応じてランクが定められている。C→S

SSま

での九つのランク。魔法を使うためには呪文を詠唱しないといけないが

慣れてくると詠唱をせずに魔法を使う事もできる。これを詠唱破

棄と言

う。だがこの詠唱破棄はかなり危険なものである。呪文の詠唱は

魔法の

構成などを整えるものであり、それを破棄するということは魔法が不安

定になりやすい。それを自らの技量でカバー出来るようになるのには少

なくとも数年の修業が必要である。ただ、この詠唱破棄が出来るように

なれば魔法の展開が早くなり様々な場面で有利に立てる。この学

院の卒

業試験はAAAランクの魔法いずれかの詠唱破棄となっている。

「君には公安部に入る資格は十分にあると俺は思うが・・・」

「断る」

「そうか・・・それは残念だ。気が変わったらいつでも言ってくれ。その

時は歓迎するよ」

「・・・一つ訂正しておく。・・・俺があの時使おうとしたのはAランクの魔

法じゃない」

カズキの言葉に輝彦は哑然とした。Aランク以上の魔法となつてくると

殺傷能力がかなり高くなってくる。それ故に学院内では使用厳禁なのだ。

授業で許可が出る場合もあるが原則として厳禁だ。下手をすれば死

人が出るからである。

「・・・なら俺も一つ忠告しておく。先輩相手にその喋り方は止めとけ。ト

ラブルの種になるだけだ」

「・・・考えておく」

カズキは生徒会室を後にした。まだこの時、輝彦は気づいてもらい

なかった。

このカズキという一年生と自分達公安部が対立することを・・・

二話「彷徨う精霊」

二話「彷徨う精霊」

「学院内に精霊？それも上級精霊が？」

「目撃情報は一つや二つじゃないんです。・・多数の生徒がいろんな場所

で見えています」

東京魔学院生徒会公安部は現在一つの問題を抱えていた。最近学院内で

精霊が目撃されるのだ。下級精霊であれば問題はない。ただその目撃さ

れている精霊はまず間違いなく契約制霊なのだ。教職員の一部も目撃し

ているが、その精霊を捕獲するには至っていない。

「契約主と喧嘩でもしてるんじゃないか？」

「初めて確認されたのは・・入学式の頃ですよ」

「一週間前・・か」

契約制霊と契約主の関係は主従関係だ。それでも契約制霊が反発するこ

とはよくある。種族の違いなどもあり互いに言い争い、出来てしまった

溝を埋めることが出来ずに契約を解除するというケースも少なくはない。

ただ、輝彦は一週間という長さに疑問を抱いていた。

「・・とりあえずその精霊を捕まえるしかないな・・」

「ですが・・先生達でさえ捕まえられなかったのですよ」

「このまま放っておくってわけにもいかないだろ」

公安部は臨時に全員が集まることとなった。といってもすでに放課後。用事

で来れない者もいるのは当然だった。十五分後、生徒会室に集まったのは輝

彦と先ほどから生徒会室にいた者を除き五人。

「急なことだ。仕方ないが・・この人数じゃきついな」

輝彦がそういった時、生徒会室のドアが開いた。入ってきたのは黒い服を着

た一人の男だった。輝彦が立ち上がる。

「部外者は立ち入らないで欲しいのですが・・」

「学院長の許可は取っている。文句はあるまい？」

男は一つの紙を提示した。それに見覚えがある輝彦は呆然とした。その紙に

はその男の素性が書かれていた。欧州魔術教団所属の魔術騎士、アカツキ。

それが男の名前だった。欧州魔術教団というのは、欧州大戦と呼ばれる初の

人類同士の魔法戦争で国際魔法機関から独立を果たした組織だ。

ちなみに日

本は国際魔法機関に参加しておらず、魔術教団に入っている。だから魔術教

団の騎士が日本に来ていても不思議ではない。ただ問題はアカツキの所属し

ているのが欧州魔術教団ということだ。アジアには魔術教団の支部として東

洋魔術教団がある。魔術教団が介入しなければならないような事件が発生し

た場合そこから人が動かされるのが普通である。

「この学院内に彷徨っている精霊を保護しに来た。出来れば協力していただき

たい」

「私達はその精霊と話し合ってみるつもりですが・・」

「話し合い？・・・そんなものは不要だ」

男の表情が一変する。かつて起きた人と精霊との戦争。一般に精霊戦争と呼

ばれる戦争のこともあり、精霊を憎む人は少なくはない。精霊を無差別に殺

していくという輩も存在する。国際魔法機関や魔術教団もそれを容認してい

る節すらある。教団内に精霊を憎む者がいたとしても不思議ではない。ただ

輝彦はこの男は異常だと思っていた。

「外部の人間に頼る前に私達も努力をしてみたいのです」

「・・・そういうことであれば私は待とう。だが、君達が失敗した時は・・・」

「分かっています」

アカツキは部屋から出て行った。確かにアカツキは教団からは保護を命じら

れているかもしれない。だが、監視役が誰もいない状況であれば事故に見せ

かけてその精霊を殺すことも可能だ。教団の魔術騎士と言えば位はかなり上。

それも単独行動を許されているほどの男だ。そんなことからいでは咎める者は

誰もいないだろう。何としても精霊を公安部で保護せねばなるまい。

「さて・・・早速搜索するか・・・」

公安部のメンバーはその精霊が目撃されたいくつかの場所を重点的にその周

囲を捜すことにした。輝彦はポケットから携帯を取り出し弟の健太を呼び出

す。少しでも人数は多いほうがいい。

「お前・・・カズキ君と同じクラスだったな？」

「ああ。でも今日は休んでた」

「そうか・・・。手伝う気があるなら生徒会室まで来い」

もちろん健太が断れるはずはなかった。輝彦は健太と共に一階の実習室付近

を捜す。この場所は一番初めに精霊が目撃された場所だ。その後
もここがー

番多く目撃されている。

「・・・一つ思ったんだけど・・・精霊って確か姿消せるよな？」

「ああ、そのはずだ」

「ならその精霊はどうして姿を見せてるんだ？」

輝彦は足を止める。精霊は霊体に近い存在だ。元々は実体は持たない。ただ

魔力で物質化しているだけ。普段は物質化をしていないことが多い。だが学

院内で目撃されている精霊は姿を消していない。

「その理由は・・・私からお答えしましょう」

廊下の先から聞きなれない声が聞えてきた。健太と輝彦が警戒する。そこか

ら姿を見せたのは一人の精霊だった・・・

三話「姿を消さない理由」

三話「姿を消さない理由」

「・・・本来であれば私達精霊は姿を消しておくのが常識なのです」

精霊は公安部のメンバーに語りかける。精霊の常識と何故自分がその常識を守らないのかを。正確に言えば守れない理由がある。

「姿を消せないんです」

「姿を消せない？」

「一種の力の封印・・・ですね。契約主が打ち込んだ楔で私には制限がかけられているんです」

輝彦達は黙った。精霊戦争以降のこの世の中ではそんなことは常識にすらなってきた。精霊戦争以前の人と精霊は友人であった。だがあの戦争がその関係を一変させた。精霊と契約主の関係は以前の協力関係から主従関係へと変化した。もちろん人間が主である。精霊の力に制限をつけ、精霊を無理に従属させるなんてことも実際に起こっている。

「・・・君の契約主は？」

「それは・・・」

精霊は黙る。確かに名前を言えば彼女にとってかなりまずい状況には

なるだろう。だからといってこのまま放っておくわけにもいかない。

「契約主と話し合いをすれば・・・」

「話など聞いてくれません・・・。あの人は精霊が大嫌いなんです」

「ではどうして精霊と契約を・・・」

「家の都合というやつだろう。輝彦」

そう発言したのは公安部副部長である成瀬達彦。成瀬家と言えば日本

では五指に入るほどの家柄だ。達彦自身もかなりの実力者だ。た

だ性

格は家柄に相応しいとはいえない。

「親に押し付けられての契約なんてことはよくある話だ」

「・・・本当か？」

「ああ・・・ヤマト家なんてところじゃ日常茶飯事だろうな」

その言葉に精霊が反応する。それを見て達彦は笑う。どうやら達彦の読

みは正しかったらしい。もしこの精霊が二学年以上の生徒と契約して

るのであれば公安部の誰かが知っているはず。この精霊に関しては誰も

知らなかった。ということは一年生である可能性が高くなってくる。そ

こで浮かんできたのがカズキだ。

「お前・・・名前は？」

「リン・・・です」

「契約主と話がしたいっていうんなら手伝うぜ？」

達彦の言葉に輝彦も頷く。だがリンはその申し出を断った。理由も明らか

かにせずリンは生徒会室を出て行く。

「このままだと消されるだろうな・・・あいつは」

「・・・健太、お前は明日、カズキ君にこのことを話してくれ。成瀬、
久々

に大仕事になりそうだな」

輝彦の言葉に達彦が微笑んだ。公安部の仕事はほとんどが雑務だ。
たま

に今回のように事件が発生する事もあるが、それは本当にたまに
である。

ここ一年の間公安部は雑務だけをこなしていた。何もそれは悪い
事では

ない。むしろ良いことだろう。ただ達彦のような人間にしてみれば少し

つまらないとなってくる。

「・・・さて・・・じゃ、俺達も準備を進めるか」

「ああ・・・」

そのころカズキは男子寮の自分の部屋で舌打ちしていた。カズキは自らの契

約精霊の行動に不満を抱いていた。

「こんなことになる前に消しておくべきだったか・・・」

誰もいない部屋の中でカズキは呟く。これまでは何の問題もなかった。

契約を解除しているかのような状況であつたが、それでも両者に対立

はなかった。精霊もカズキも無駄な争いを望んではいなかったから。

互いに干渉することはなかった。今回も精霊にその意思はないだろう。

だが、公安部が絡んで来るとなると厄介だ。

「・・・遅すぎた処置だが・・・仕方ない・・・。これ以上面倒事が増える前

に摘んでおくべきか・・・」

カズキは音も無く立ち上がった・・・

四話「憎しみの剣」

四話「憎しみの剣」

「何事ですか？学院長、これは一体・・・」

それは真夜中に唐突に起きた。学院の男子寮の方向から爆発音が鳴り響いた。次の瞬間には男子寮の屋上から煙が上がっていた。学院長を含む教員達は驚いていた。

「外部からの侵入者とは考えられません・・・彼の残した遺産がここにはあるのですから・・・」

「では、生徒が？」

「そう考えるのが妥当でしょう」

また爆発音が聞える。今度は中庭の方からだ。学院長は目を閉じていた。精神集中し、何が起きているかを探っている。数秒後目を開け、告げた。

「・・・どうやら一年のようですね・・・暴れているのは。公安部の生徒にも連絡を。夕方報告があつた精霊の件と関係があるかもしれません」

教職員はすぐに散らばつた。一つのグループは男子寮の方へ。もう一方は中庭へ。屋上と中庭の両方で使われた魔法は恐らくAAランクの攻撃魔法。威嚇のレベルではない。攻撃を仕掛けている方は相手を消す気だろう。喧嘩にしては少しやりすぎだ。犯人の目星はついていていた。一年でAAランクを躊躇いもなく使える者は一人しかいない。

「・・・全く・・・とんでもない問題児だな・・・彼は」

男子寮の入り口では輝彦と達彦が合流していた。彼ら二人は精霊の一件を今日の夕方に学院長に報告していた。そして彼らは何か妙な事が起こればすぐに知らせて欲しいと学院長に伝えていた。

「・・・カズキとかいう生徒・・・だろうな」

「恐らくな・・・彼女を消す気だろう。AAランクの魔法なんて威

嚇に使うものじゃない」

達彦は舌打ちしていた。相手が本気でくるならこちらも相応の覚悟で望まなければいけない。それに恐らく相手は達彦達より格上だ。手加減なんて出来る相手じゃない。むしろ本気で向かわねば二人がまずい状況になる。

「・・・下級生相手にあれを使うのは嫌いだが・・・仕方ない」

「待てよ、お前・・・正気か？」

「・・・仕方ないだろう。これくらいやらないと・・・止めれないさ」
二人は中庭へと向かい走っていく。そのころ中庭ではリンが飛んでくる光球を回避していた。光球が当たった壁が音を立てて軋む。対魔術用の防壁が張られている壁ですらこれだ。あたれば一撃で瀕死もありうる。

「止めてください・・・カズキ様」

「黙れ。・・・お前にはここで消えてもらう。今後のためにも」

カズキは剣を持っていた。それを振り下ろそうとする。だがその剣に何かがからみついた。

「しまっ・・・」

カズキの足元に魔法陣が描かれていく。その魔法陣から鎖が伸びてくる。すぐにカズキは拘束された。捕縛結界。結界の範囲内に入った

者を鎖で縛る呪文。鎖には対魔法処理が施されている。

「・・・ただの捕縛結界じゃない・・・。動けば電流が走る仕組み・・・か」

「そうだ。捕縛結界に俺なりのアレンジを組み込んで」

カズキは舌打ちしていた。鎖の対魔法処理のせいで魔法は使えないし

更に少しでも動けば電流が走る仕組みだ。これでカズキは動きを封じ

られた。魔法を使えない時点でカズキの敗北は決定している。ここは

輝彦達の指示に従うしかない。

「この精霊は君の契約精霊だな？」

「・・・ああ、そうだ」

「ならどうしてその精霊を襲うんだ？」

輝彦の問いにカズキは黙り込む。人には言えない理由があるのだろう。

輝彦とリンの関係はかなり複雑なはずだと考えていた。少なくとも他の

精霊と契約主のようなものではない。精霊を恨んだり憎んだりしている

契約主は精霊をまるで奴隷のように扱う。だがカズキにはそれがない。

カズキはリンの存在自体を否定し消そうとしている。奴隷扱いする連中

より厄介かもしれない。

「君は精霊が嫌いか？」

「・・・そんな質問に答える理由はない」

「・・・どうやら自分の状況が分かってないらしいな・・・お前は」

達彦がカズキに近づく。出来る限り穏便に事を済ませようと考えている

のは輝彦であって達彦はそうではない。もしカズキが反抗的な態度を見

せればいためつけるとも明言していた。それがより早い解決を生むはず

だとも。だが輝彦はそうは思わない。

「・・・成瀬、止める。彼を殴っても何も終わりはしない」

「そろそろ学院長達もここに来る。その前に・・・」

「もう来ていますが・・・」

三人の視線が一点に集まる。輝彦の背後にそっと立っている人物を見た

目は二十前後の青年。とても日本人とは思えないきれいな金髪の青年。

それが東京魔学院学院長の高坂昌吾。容姿は若いが達彦や輝彦の父親よ

りも何十年も年上と聞く。この学院長についてはいろいろと噂がある。

精霊戦争に参加していたとか、昔は反政府運動の中心人物だったとか

欧州戦争時には第3勢力として戦争に介入し戦争の早期終結を実現した

とか。その内のどれが本当でどれが嘘なのかは分からない。ただ謎の多

い人物ではある。

「学院長・・・」

「困ったものですね、カズキ君。男子寮の方も君の仕業ですか？」

「・・・そうです」

「理由は聞くまでもありませんね。その精霊絡みですか・・・」

学院長はカズキに近づいた。輝彦は捕縛結界を解く。その瞬間カズキは

学院長に体当たりした。学院長がよろめいた隙に小規模な爆発を起こし

煙を生じさせる。達彦と輝彦はカズキを見失った。煙が消えた頃には当

然カズキはその場にはいなかった。

「学院長、大丈夫ですか？」

「私は無事ですよ。・・・君達の方は？」

「特に問題はないです。・・・ですがカズキは・・・」

学院長は微笑んでいた。その微笑みが何を意味しているのかをまだ輝彦

と達彦は理解出来なかった。

「さて・・・貴方にはいろいろと話を聞きたいのですが・・・」

「ええ・・・構いません」

「では、君達も来なさい。・・・私の部屋で詳しい事は聞きましょう」

三人と一人の精霊は学院長室へと向かい歩いていった・・・

五話「精霊の願い」

五話「精霊の願い」

「大体の事情は理解しました……。それで貴方はどうしたいのです？」

「え？」

リンがきよんとする。学院長は何も言わずリンのことを見ている。結局はリンがどうしたいかなのだ。それを知らない限り達彦達は何の協力も出来ない。

「……私は……話をしたいんです。あの人と……」

「そうですか。では話は簡単ですね。カズキ君を話し合いの場に引つ張り出せばいい」

学院長は微笑みながら言った。顔は笑っているが目は笑っていない。たいしたダメージでないとはいえ、やはりあの体当たりは許せないのだろうか。

「と言っても……私が干渉するのはまずいでしょうから……表向きには君達に動いてもらいます。よろしいですね？」

「はい。ですが……表向き……とは？」

「人員などは全て私が用意しましょう。必要であれば国軍にも連絡を……」

「それは結構です」

達彦と輝彦が同時に言う。この学院長であれば本当にやりかねないから怖い。結局学院長の友人数人が公安部に協力するという事になった。学院長は先ほどから電話をかけている。協力してくれる人を捜しているのだろう。

「ええ、そうです。少しくらいの報酬は……というより君はお金がないと動かないのですか？え？そもそも日本にはいない？……いや、それは知りませんよ……飛行機代まで私に請求するのですか？……まあ、いいです。ですが……他の人員は

・分りました」

電話を切った学院長の顔が少しひきつっていたのは二人の間違いではないだろう。ため息をつき学院長は椅子に座る。そして協力者の名を口にした。

「三好武彦。・今日の夕刻には来るとのことです」

「三好・武彦!？」

「なんだ、輝彦、知り合いか？」

三好武彦。謎の多き日本人。過去などは全く明かされておらず詳細は不明。日本人であるかどうかただの推測でしかない。名前すら偽名であるかも知れないのだ。精霊戦争や欧州戦争と言った魔法戦争においての英雄。特に欧州戦争ではベルリンの悪夢とも言われ、二度のベルリン陸戦では戦力的に負けている教団側を勝利に導いたことで有名だ。

「よく知ってますね。・他にも数人連れてくるそうですよ。ま、楽しみにしてください。彼に会えるなんて滅多にないですからね」

学院長が苦笑いと言う。三好武彦はかなり神出鬼没である。欧州大戦の時はずっとヨーロッパにいたのに、戦争終結時には中国で確認されている。かと思えばその数日後にはイギリスにいたとも報告されている。世界のいろいろな組織が勧誘したがっているというのに彼と話をする機会すら作れない。

「凄い人と知り合いなんですね、学院長は」

「今でこそ学院長なんてやってますが・昔はいろいろと危ない橋も渡りましたからね」

そう語る学院長は苦笑いしていた。とりあえず達彦と輝彦の二人は寮に戻る事にした。学院長は今日の夜にでも動く事は出来るが、明日の夕刻に三好武彦率いる協力者が到着してから作戦をきつちりと考え万全な態勢で明日の夜に決行すると言った。確かに今日の昼間に公安部を集合させ、話をしていきなりその日の夜に決行すれば予想もしないハプニングが起

きる可能性は出てくる。カズキの实力は確かなものだ。油断すれば負けるだろう。だからこそしっかりと計画を立てなければいけない。そのころ、ドイツのベルリンに三好武彦は居た。武彦の横には一人の女が立っていた。年齢は二十歳前後だろうか。そして二人の後ろにあるベッドの上には一人の少女が眠っていた。

「ベルリンの悪魔とも呼ばれた男が学生一人を捕まえるために日本に行くなんて・・・笑えるな」

「戦友の頼みだ、仕方ないだろう」

「それで？私はここを守っていればいいのか？」

「西原達も置いておく・・・しばらくは戻らんぞ」

武彦はため息をついた。確かに笑えてくる。過去の戦争ではたくさんの人を殺しておきながら今は平和な日々を送っている。

「西原達も・・・茨城のを動かすのか？時期尚早だと私は思うのだが・・・」

「東京なら茨城が一番近い。それに俺はいい頃だと思う」

女はまだ不服そうであつたが何も言わなかった。ここで口論をしても仕方ない。それに意見を述べた所で武彦が意見を変えないのは知っている。

「・・・留守の間は任せたぞ」

「ああ・・・任せろ。この娘は私が守つてやる」

そのころ、東京魔学院の一つの校舎の屋上ではカズキとアカツキが会話をしていた。

「どうやらドイツからとんでもない大物が来るようだな・・・さすがの君もまずいのでは？」

「・・・あんたに協力を頼みたい」

アカツキは微笑んでいた。その言葉を待っていたかのように。互いの思惑が絡み合いながら、夜は深くなっていく・・・

六話「顔合わせ」

六話「顔合わせ」

「今日の放課後、公安部メンバーは生徒会室に集まってくれ」

達彦は公安部メンバー全員にメールを送信した。今日の夕方三好武彦率いる協力者達がやってくる。何のトラブルもなければだが。学院長が言うには最近ヨーロッパの状況が劇的に変化しつつあるらしい。現在世界には二つの大きな組織が存在する。一つは魔法社会の形成に大きく関与した国際魔法機関。そしてもう一つはヨーロッパの魔術師達が国際魔法機関に反旗を翻す形で作られた魔術教団（欧州教団）である。この二つがヨーロッパを舞台に激突したのが欧州戦争である。魔法教団にはヨーロッパの全ての国が加盟している。アジアでも数国が参加している。ただこの教団が分裂の危機を迎えているらしい。いろいろな事情からドイツを中心とした少数の国が国際魔法機関に参加しようとしているらしい。ドイツは魔術教団の創立に大きく関与しており内部機密も保持している。そこで他の国からすればそんな国を敵側に行かすけにはいけないのだ。力づくで止めることになったとしても。

（・・・三好さん達は来れないって事も十分にありうるな）
あまり考えたくはないがその可能性は十分にある。武彦もドイツにいるのだから。そんなことを考えながら輝彦は授業を受けていた。そのころ学院長は一本の電話を受けていた。

『武彦の代わりに私が行く事になった』

「・・・教団の分裂・・・なんてことじゃなさそうですね」

『ああ。武彦が保護している娘が熱を出してな』

「彼らしい理由ですね・・・」

学院長は苦笑していた。ベルリンの悪魔と呼ばれ敵からも味方からも恐れられていた戦士だと言うのに戦場以外では意外に心配性だったりする。責任感が強いのもあるだろう。一度保護したのだから最後まで面倒をみなければいけないと思っているかもしれない。

『ではよろしく頼むぞ』

そして放課後。生徒会室に公安部メンバーは集まっていた。事情を知っている二人を除いて他全員が驚いている。刀を持った数人の見知らぬ男と、明らかに教職員ではない女がいるからだ。まずは自己紹介を行う事にした。公安部のメンバーからはじめていく。

「坂本信雄。学年は四年。公安部副部长です」

達彦の隣に座っている男子が言った。公安部副部长。普段は事務仕事全般を引き受けているためここに来ることは滅多にない信雄の横の生徒から順番に自己紹介をしていく。そして今度は彼らの番となった。まず一番左端に立っている男が名前を言う。

「日下部修一だ。よろしく」

そして次にその横の男が発言する。

「ト部亮だ、よろしくな」

「仙波小五郎だ。よろしく頼む」

そして最後に右端に立っている女が発言する。

「ルイだ。今日は武彦の代わりとしてやってきた」

これで一通り自己紹介は終わった。ただ輝彦は少し妙に思っていることがある。ルイはともかく、日下部とト部と仙波の三人は軍人に見えて仕方がない。それに彼ら三人が持っているのは日本刀だ。とても普通の人

には見えない。だがそんなことを気にしても仕方のないことだった。むしろそれならそれで頼もしい。

「一つ聞きたいんですけど・・・ドイツで何かあったんですか？」

「そんなことじゃない。ただ個人的な理由で来れないだけだ。そんなことより、具体的にどうやって捕まえるんだ？」

輝彦は自分の考えた作戦を話す。ルイや日下部達四人がまずカズキを追いつ込む。そして後は輝彦達がカズキを完全に包囲しこちらの要求に従わせる。口で言うのは簡単だが、カズキに輝彦達が待っているのを悟られてはお終いだ。出来るだけ伏兵の存在に気づかれないようにしないといけない。

「一つ確認したい。捕まえるのは生徒一人だな？」

「そうだけど・・・」

「質問を変えよう。この学院に教団の人間はいるか？」

輝彦はすぐに一人の人物を思い浮かべる。アカツキだ。アカツキはまだここにいないはずだ。アカツキの名を口にするとト部達が異様な反応を見せた。

「まさか・・・こんな所で奴と会うことになるとは・・・」

「アカツキ・・・か。厄介な男だよ」

アカツキの精霊嫌いは有名ならしい。ルイはアカツキの介入も十分にありうろと言った。

「ト部と日下部の二人がアカツキを抑えるしかないな」
アカツキに邪魔されればどうなるかわからない。カズキを追いつ込むにはルイと仙波の二人がいるだけでも足りるだろう。

「二人とも頼んだぞ」

「承知」

そのころカズキはアカツキと共に屋上にいた。アカツ

キは仙波達が来ているのに気づいていた。

「俺が囹を務めよう。お前のような子供にあの四人の相手はきついだろう」

「・・・あんなら出来るのか？」

「何度か戦ったことはあるが・・・勝ったことはないな」

カズキは舌打ちした。明らかに不利だ。まだベルリンの悪魔が来ていないだけましとは思うがそれでもきつい。カズキも学生としては優秀であるが、あくまで学生としては、だ。大人相手、それも元軍人相手に互角に戦えるはずもない。だからといって諦めるわけにはいかない。

「・・・どうにかしてその四人を足止めしなければいけないか・・・」

「お前は どうしてそこまであの精霊を消したいんだ？」
「仇を討つためだ」

カズキの心の中にあるのは復讐心だけだった・・・

七話「復讐」

七話「復讐」

「ト部、俺は左から攻める」

「分かった」

ト部と日下部の二人はアカツキの足止めのために戦っていた。日下部が左から回りこみ、ト部は右からアカツキを追い込む。二人は左右からの挟撃を実行していた。

「ベルリン以来だな、アカツキっ」

「まさかこんな所で会うとはな……。だがベルリンでの雪辱を晴らすチャンスでもある」

「我ら二人を相手に勝てるത്？笑わせてくれる」

日下部が刀を鞘から抜いた。アカツキは日下部の足を止めるために炎弾を放つ。日下部がよろめいた所をアカツキは攻める。だが、ト部の放った斬撃がアカツキの足を捉えた。

「くっ・・・」

「後の障害は取り除くべきだと俺は思うが・・・」

「同感だ、ト部。ここで仕留めるぞ」

「承知」

二人がアカツキに斬りかかった頃、ルイと仙波の二人はカズキの姿を捉えていた。リンは学院の一号校舎の屋上に居る。現在カズキが居るのは一号校舎の入り口付近だ。屋上付近には達彦達が待機している。ルイと仙波の目的はカズキを屋上まで追いやることだ。

「・・・まずは私が仕掛けましょう」

「頼んだぞ、仙波」

「承知」

仙波が刀を構えカズキに近づく。カズキもすぐそれに気づいた。

「小僧、お主にう恨みはないが・・・これもあの方のため・・・ここで死んでもらうっ」

仙波が襲いかかった。カズキはそれを回避し階段を駆け上がる。仙波はその後を追う。その様子を見てルイも別の入り口から校舎の中に入る。カズキは走りながら考えていた。リンの居場所は校舎の屋上。達彦達は恐らくそこにいる。仙波達はあくまで囷だろう。本命は達彦達に違いない。それを知りながら、カズキは輝彦達の所へと向かっていた。

「・・・あんな連中まで呼ぶとは・・・驚きだ」

「これくらいやらないとお前を話し合いの場に連れていくのは無理だろうからな」

輝彦達とカズキが睨みあう。互いに殺しあうつもりなどなかった。カズキにしても輝彦達を力ずくで黙らせるなんてことはしたくない。

「・・・どうしてそこまでこだわる？」

「学院内に精霊が彷徨っているという状況を解決したい」

カズキは笑った。本当はそんな理由ではないだろう。もっとちゃんとした理由があるはずだ。ただそれを言いたくないだけか。輝彦が叫ぶ。

「信雄、左から回り込め」

「・・・もう遅いっ」

カズキの姿が一瞬で消える。信雄は舌打ちした。そこへルイと仙波が到着する。二人は様子を見てすぐに事態を察知した。

「今あの精霊は一人だ。・・まずいな」

「仙波、貴方は卜部と日下部の支援を、私達はすぐに精霊の所へ向かうわ」

仙波が頷く。最悪の状況だ。今リンは一人だ。

そこへ向かわれたらまずい。とりあえず今出来ることは可能な限り早くリンの所へと向かうことだ。

だが走り出そうとしていたその時ルイは異変に気づく。校庭に何台かのトラックが入ってくる。

「・・あの紋章・・」

「ルイ・・さん？」

「二人は先に行って。私は・・あれを破壊する」

ルイが屋上から飛び降りる。途中でルイの背中に翼が生えた。そしてトラックへと向かう。信雄と輝彦は顔を見合わせ頷き走り出す。仙波達もその異変に気づいていた。

「結局俺はただの予備でしかなかったか・・」

アカツキは武器をしまう。仙波達が驚く。アカツキは行けと言った。

「俺の出番はここまでのようだ」

「・・行くぞ、日下部、仙波」

「おう」

三人の男もトラックへと向かう。そして学院長もその様子を見ていた。学院の校庭に侵入してくるトラック。その車体には一つの紋章が刻まれていた。

「・・欧州魔法教団所有のトラック？・・まさか・・」

アカツキすら知らなかった欧州魔法教団の非道な作戦が始まるうとしていた・・

八話「心を持たぬ兵士」

八話「心を持たぬ兵士」

ルイ達は舌打ちしていた。トラックの中から姿を見せたのは彼らが予想していたものだった。白銀の装甲の機械。全長は人とさほど変わらない。国際魔法機関でも以前正式採用されようとしていた自律行動可能な人型兵器。通称ファントム。動力源は魔力であり、注入した魔力が切れるまで動き続ける。だが心を持たない兵士はただの殺戮者でしかない。国際魔法機関内でファントムについては反対する者が多く、結局採用されずに終わった。そこで終わればファントムはこの世に存在しない。だが、国際魔法機関で不採用となったことに不服を抱いた研究者達はファントムの試作型とデータと共に欧州魔法教団側へと移る。そして欧州魔法教団ではファントムは正式採用となった。

「心を持たぬ兵器・・・」

「校舎の中には一体も入れないで・・・入られたら終わりよ」
「分かっています」

仙波達の放つ魔法弾がファントムに直撃する。だがトラックからは無数のファントムが出てくる。このファントム達はトラックに積まれているのではない。トラックの中に魔法陣が描かれておりそこから現れているのだ。空間転移呪文の応用といった所か。トラックごと破壊すれば増援は止まる。だがファントムも当然それを理解しているのでトラックを守ろうとする。

「死すら恐れぬというのか・・・こいつらは」

「こんな場所では大掛かりな呪文を使うわけには・・・」
四人がファントム相手に苦戦している頃力ズキはリンがいる部屋の前にいた。だが、床が突然消えてなくなる。

「なっ!？」

そしてカズキの目の前には学院長がいた。

「・・・どうやら彼らでは貴方を止められなかったようですね」

「あの四人を呼んだのは・・・あなたか、学院長」

学院長は答えない。カズキは舌打ちした。生徒の中では上位の力とは言え、学院長に勝てるなんてことはまずない。奇跡が起きたとしても相打ち程度だろう。

「どうして精霊を殺そうとするのです？」

「目障りだ・・・精霊は」

「・・・精霊戦争すら起きなければ・・・自分の運命は変わっていったかもしれない・・・そういうことですか・・・」

学院長の言葉にカズキは呆然とする。この人は全て知っている。知っている上で話していると。カズキの家は精霊使いの一族だ。だが精霊戦争で精霊使いの大半は世界から孤立してしまった。今ではそんなことはないが、あの戦争直後は凄まじいものでもあった。カズキの母親は周囲からの言葉に耐えられず狂ってしまった。い、父親も誰とも話さなくなった。いじめなんてものではない。世界全てから存在を否定された。そんな感じだ。だが精霊の存在を否定する否定派と精霊との共存を主張する共存派の対立が激化し始めた頃、カズキの祖父は精霊との共存を主張し自らの孫であるカズキを精霊と契約させた。だがそれはカズキ本人が望むものではなかった。

「・・・あの戦争さえなければここまで精霊を恨むことなどなかった」
「彼女に直接の罪はないはずです」

「それは・・・」

カズキは口ごもる。リンは確かにあの戦争とは何の関係も無い。あの戦争に関係していた精霊の大半は人間の手で始末されている。カズキが反論しようとした時上から悲鳴が聞える。

「・・・今のは・・・」

「リンの悲鳴だ・・・アカツキが先についた・・・のか？」

カズキが戸惑う。アカツキには彼ら四人の足止めを頼んだだけだ。何かがおかしい。達彦達がリンを襲うはずはない。とすれば誰なのだろうか。その時、廊下で何かが発したような音がした。カズキは外に飛び出る。

「これは・・・」

ガラスを撃ち破りながら白銀の機械が近づいてくる。一体や二体ではない。数十体だ。カズキは魔力の壁を作り、銃弾を防ぎ一気に距離を詰めた。明らかにこの機械からは殺意や敵意を感じる。友好的な存在ではない。

「・・・まるで無差別に破壊しているようだ・・・」

機械達は目の前に見える物全てを破壊するかにように攻撃している。明確な攻撃目標など存在しないのだろう。

「ならば・・・全て潰せばいいだけだっ」

そのころ、リンの前にはファントムの体当たりを喰らい倒れている達彦と信雄がいた。そしてファントムは二人を蹴ってどけるとリンに近づく。

「何？・・・一体・・・」

リンは混乱していた。よく状況が掴めない。達彦と信雄の二人はリンを心配してこの部屋に入ってきた。そしてカズキが来るのを待とうと話していた時、ファントム数体が突如乱入してきた。二人は応戦したが、負けてしまい倒れている。ファントムの腕がリンを掴もうとしたその時、一番前にいたファントムの腕がちぎれ飛ぶ。悲鳴は上げないが、ファントムが少し後ろに下がる。

「・・・教団の玩具にしては反応がいいじゃないか」

「・・・誰？」

リンの前に一人の男が立っていた。ファントム達が一斉に飛び掛るが全てばらばらになる。

「・・・あんたが、リンっていう精霊か」

「どうして・・・私の名前を・・・？」

「三好武彦って言えば分かるだろう？」

学院長が呼んだ人だとリンは理解した。だが何か事情があり来れないと言っていたはず。武彦はファントムの残骸を触る。

「・・・その二人の治癒は出来るか？」

「応急処置程度なら・・・」

「大した傷でもなさそうだ。応急処置だけで十分だろう」

武彦は二人の事は任せたと告げると部屋を出て行く。だがそこにはファントムの群れが待っていた。

「子供一人ねじ伏せるだけの簡単な仕事と聞いていたが・・・」

「相手は戦意剥き出しだ。・・・全て潰すしかなかるう」

「学校の中だつてことは忘れるなよ、デュフォン」

デュフォンと呼ばれた虎の精霊は苦笑した。武彦もファントムの群れに突っ込んでいく。それを見てデュフォンも突っ込んだ。そのころ、近くにいた教団の幹部達はアカツキの襲撃を受けていた。

「・・・貴様も教団の軍人だろうっ・・・」

「俺は理由があれば裏切るさ。教団の信者とは違う」

アカツキは許せなかった。学校に無差別破壊の命令を出した教団の幹部達を。リン一人つれて帰るくらい、アカツキ一人でも出来たはずだ。いくら邪魔になったとはいえ、生徒達を傷つける必要はなかったはずだ。

「俺は今日限りで教団を抜ける。・・・まずはお前達の屍を手土産に彼らの所へ行くさ」

アカツキの放った魔法弾が幹部の心臓に直撃する。即死だった。残った数人も同様に蹴散らす。だがまだ学校での騒ぎは収まっていない。アカツキも学院へと戻ることにした。心を持たぬ兵士達を処理するために・・・

九話「初めての力」

九話「初めての協力」

「何とかしてトラックを破壊するしかないな」

武彦は舌打ちしていた。トラックを攻撃してもファントムの群れの一部がそれを止めてしまふ。何とかしてファントムの群れごとトラックを破壊せねばならない。

「デュフォンと俺のシンクロで破壊しても良いが・・・」

『最低でも数日は校庭が使えなくなるな』

シンクロ（同調）。精霊と契約主の心を一つにし強大な魔法弾を放つ技。精霊と契約主の心が完全に一致しなければいけないが、長年共に戦ってきたデュフォンと武彦ならば造作の無い事だ。だが問題は威力だった。この二人のシンクロだと数日の間校庭が使用不可となってしまう。それだけの威力が出てしまうのだ。

「他にシンクロが出来るのは・・・あいつらか」

『だが・・・あの二人にとっては初めての協同作業となるのだ』

「・・・本当にあの精霊を憎んでるのならとづくにあの精霊はこの世にいないさ」

結局カズキはリンを憎んでいるのではない。怒りの矛先をどこへ向けていいのか分からないうちに、リンと契約してしまったために、リンを殺そうとしているのだ。やり場の無い怒りをリンにぶつけているだけに過ぎない。そうでなければ今日までリンが生きてきた事に説明が行かない。カズキほどの力の持ち主ならばリンを消す程度は出来るはずだ。

『そう上手く行くとは限らんが・・・』

「賭けてみるしかない」

そのころカズキは校舎の外に出ようとしていた。その少し後ろにはリンの姿もある。輝彦達は学院長が治癒している。

「俺はお前の力を借りるつもりなどない」

『それは・・分かっています』

カズキは後ろを見ようとは思わなかった。学院長はファントムの群れごとトラックを破壊するためには二人が協力する必要がある不可欠だと言っていたが、一人でもやってみせるとカズキは思っていた。精霊の力を借りるなど絶対に嫌だ。ここでリンの力を借りてしまえばそれはリンの存在を肯定することにもなる。カズキは魔力の塊をトラックに向けて飛ばした。ファントムの群れの一部が盾となる。カズキはすぐに魔法弾を数発放つ。だが、全てファントムの群れにより止められた。何度か同じ事を繰り返すカズキに呆れたように誰かが言う。

「ただの力の浪費だ。そこまで馬鹿とは思わなかったが・・」

『結局ただの子供だという事だ』

武彦とデュフォンであった。カズキは二人の言葉を無視して攻撃を続ける。だが成果が出る事はない。ファントムの群れは増え続けている。武彦はカズキの前に立った。

「無駄だと言っているのがまだ分からののか？」

「俺一人でこれくらいはやってみせる」

「お前・・自分が騙されているのは知ってるのか？」

カズキの動きが止まる。武彦は更に言葉を続ける。

「お前の爺さんの本当の目的・・教えてやってもいいぜ」

カズキが動揺する。カズキの祖父は精霊使いとしては一流の腕前だった。精霊戦争以降精霊と人の共存を訴えておりカズキとリンの契約を押し付けた張本人だ。そんな人物の本筋の目的とは一体何なのか。カズキは武彦に尋ねた。武彦は少しだけ笑うと、こう言った。

「精霊を従順な兵士に仕立て上げる事だ」

「!？」

「あの爺さんの目的はその精霊を自らの手駒にすることさ」

武彦は真剣な表情でカズキの祖父の目的を告げていく。

教団と手を結び、この国を自分の物にするためにいろいろと今までやってきた。カズキとリンの契約もその準備の一つに過ぎない。

「お前がそれでもあいつに従うって言っならそれでもいい。

だが・・・その時は死も覚悟しろ」

「・・・俺は・・・」

カズキはリンの方を思わず見てしまった。命令に逆らわない兵士。それが自分の祖父の求めるものなのか。もうカズキの答えは決まった。

「そんなもの認めるわけにはいかない」

カズキはリンの傍まで歩いていく。武彦とデュフォンは迫り来るファントムの群れから二人を守るために攻撃していく。

「・・・今までの事を忘れてくれとは言わない・・・だが・・・」

「・・・分かっています。・・・今は・・・」

二人の意識が一つになり始める。互いの思いが一つになってはじめて成功する。カズキとリンは必死に互いの思いを一つにしようとしていた。そして、カズキの腕から強大な魔法弾が放たれる。ファントムの群れが一瞬にして消え去り、そしてトラックが爆発する。

「後は残りの敵を片付ければ終わりだ。デュフォン！」

「任せておけ」

こうして学院を襲った襲撃者達は全て片付けられた。だがまだ彼らは知らなかった。これがまだほんの始まりであること。これから自分達が巻き込まれていくことになる戦いの事を。

最終話「和解そして不信感」

最終話「和解と不信感」

「・・・今までは悪かった」

カズキはリンに対して謝っていた。あのファントムとの戦いからすでに三日が過ぎている。輝彦達が見守る中カズキはリンと和解をしていた。結局あの後カズキは学院長と武彦にリンを責めた所で過去は変えられないと言われ、これからすべきことを考えろとも言われた。カズキが謝ったのに対しリンは笑っていた。

「謝る必要なんてありませんよ」

「・・・これからは俺に力を貸して欲しい・・・」

「はい。もちろんです」

リンとカズキは笑いながら握手していた。その様子を見守っていた輝彦は深刻な顔をしていた。この学院はどちらかというと教団よりである。だがその教団に学院は襲撃された。たった一人の精霊を確保するために他の物は全て壊しても構わないという命令で。輝彦は教団に対して不信感を募らせていた。もうこれ以上あの組織を信用するわけにはいかない。

「輝彦、どうしたんだ？」

「教団の事を信用するのもこれまでと思ってさ」

「ま・・・あれだけやられればな」

そしてカズキも自分の祖父に対し不信感を抱いていた。いや、すでにあんな者を自分の家族とは思えない。精霊を自らの手駒にするためだけに学院を襲撃するなどやり方が間違っているしカズキもこれまでずっと騙されてきたのだ。もはや信用など出来ない。

「・・・それよりあの人達は・・・」

「もう帰ったんじゃないか？なんか忙しそうだったし」

武彦達はあの日以来彼らの前には現れていない。いつ帰ったの

かも分からない。リンとしてはお礼くらい言っておきたかったのだが、それすら出来ていない。そのころ、武彦はルイと共に学院長室にいた。

「これからあなた達はどうするのです？」

「しばらくは身を隠す。・・どれくらいの期間になるか分からない。一つ頼みたいのですが・・この学院にあなたの部下を置いてくれませんか？」

武彦は了承した。学院がもう一度襲われる可能性は高い。今回だけであつさりと手を引くような人物じゃないからだ。これ以上生徒達を巻き込むわけにもいかないだろう。武彦も出来る限りは協力するつもりであった。

「二、三日で人員を派遣する」

「そんなに大勢はいりませんよ？」

「分かっている。アカツキを含め五人程度にする」

武彦の言葉に学院長は驚く。アカツキが武彦達の陣営に加わったのが驚きなのだ。教団内部でもそれなりの地位を獲得していたアカツキだが、この前の教団のやり方に対して不満を抱き、ついに離反を決意したということだ。

「では・・そろそろ戻るか・・」

「・・・本当にこれで良かったの？」

今まで一言も喋りはしなかったルイが静かに尋ねる。カズキ達を巻き込んだことだろう。確かにこんなことは望んではいなかった。まだ学生である彼らを巻き込む事はしたくなかった。だが、教団の強硬手段とも呼べる作戦のせいで彼らは巻き込まれてしまった。恐らく今後も教団はいろいろな手段を使いこの学院を襲撃するだろう。それだけの理由がここにはある。

「教団は本気で彼らを消しにかかるだろう」
「ファントムを見たからだ？」

「邪魔となったからだ」

武彦はもう彼らをそのままにしておくことはできないと告げた。

そうすれば彼らが危険になると。学院長はそれを理解しているし、ルイも理解した。学院を巡る争いはまだこれで終わったわけではなかった・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4965d/>

東京魔学院～精霊と契約主～

2010年10月8日15時28分発行